

玉類の流通と芝ヶ原古墳

Beads trade and Shibagahara tumulus

中村大介*・藁科哲男**・田村朋美***・小泉裕司****

Nakamura Daisuke, Warashina Tetsuo, Tamura Tomomi, Koizumi Yuji

1. はじめに

芝ヶ原古墳は、京都府城陽市の大谷川扇状地の南側丘陵に位置する南山城における最古級の墳丘墓である（図1）。かつては「芝ヶ原12号

墳」或いは「芝ヶ原12号墓」とよばれていたが、現在の正式名称は芝ヶ原古墳となっている。ただし、古墳という名称であるものの、出土土器は庄内式新段階～布留式古段階古相であり

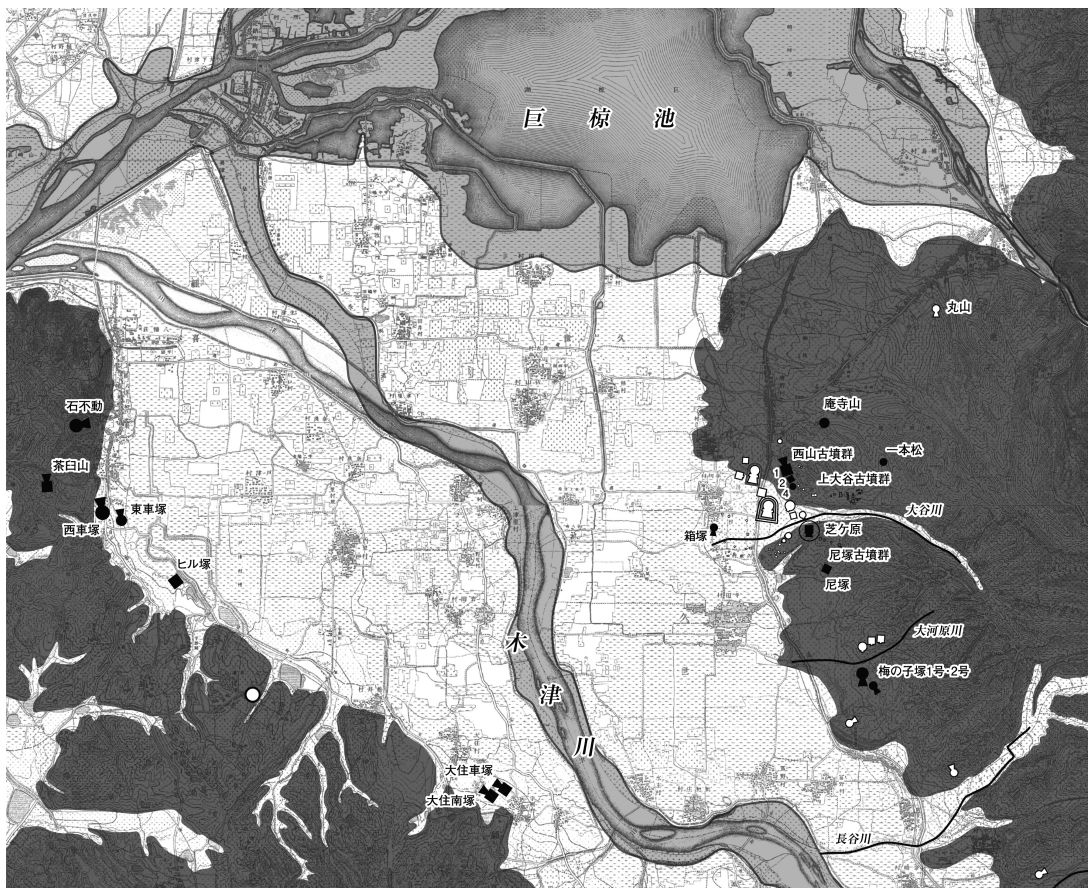


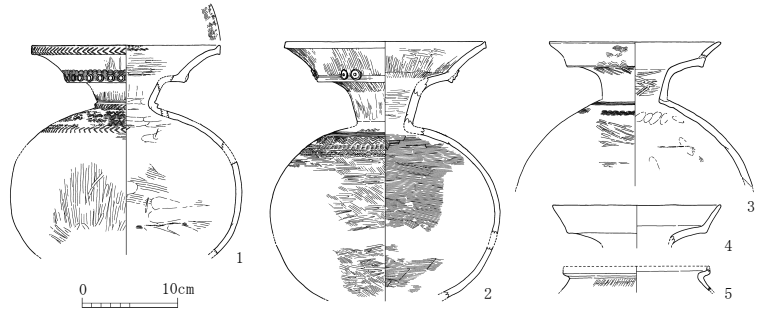
図1 芝ヶ原古墳と周辺環境（岸本 2014）

* なかむら・だいすけ
埼玉大学教養学部
*** たむら・ともみ
奈良文化財研究所

** わらしな・てつお
遺物材料研究所
**** こいずみ・ゆうじ
城陽市教育委員会

(図2)、ホケノ山墳丘墓よりも古い(長友 2014)。箸墓古墳を古墳時代の開始の画期とする立場をとるならば、芝ヶ原古墳は弥生時代終末期の墳丘墓である。

この芝ヶ原古墳には倣製鏡である四獣鏡1面、オオツタノハ或いはゴホウラの貝輪を模倣した銅釧2点が、頭部側と考えられる棺外小口付近に副葬されていた。これらの青銅器は極めて類例が少ないのに加え、弥生時代終末期の資料であるにも関わらず、高い技術で製作されていたため、研究者の耳目を集めている。そして、銅釧と同じ位置に大量の玉類が副葬されていた。芝ヶ原古墳の玉類の副葬品配置は



丹後地域の大風呂呂南1号墓と同様であり、装身具から威信財へという玉類の役割変化も指摘されている(木下 2011)。

玉類の内訳は、翡翠製勾玉8点、碧玉製管玉187点、ガラス小玉1264点以上である(図3)。これらの玉類は、弥生時代前期末には全て出現し、その後、西日本全体で一般的な装身具かつ

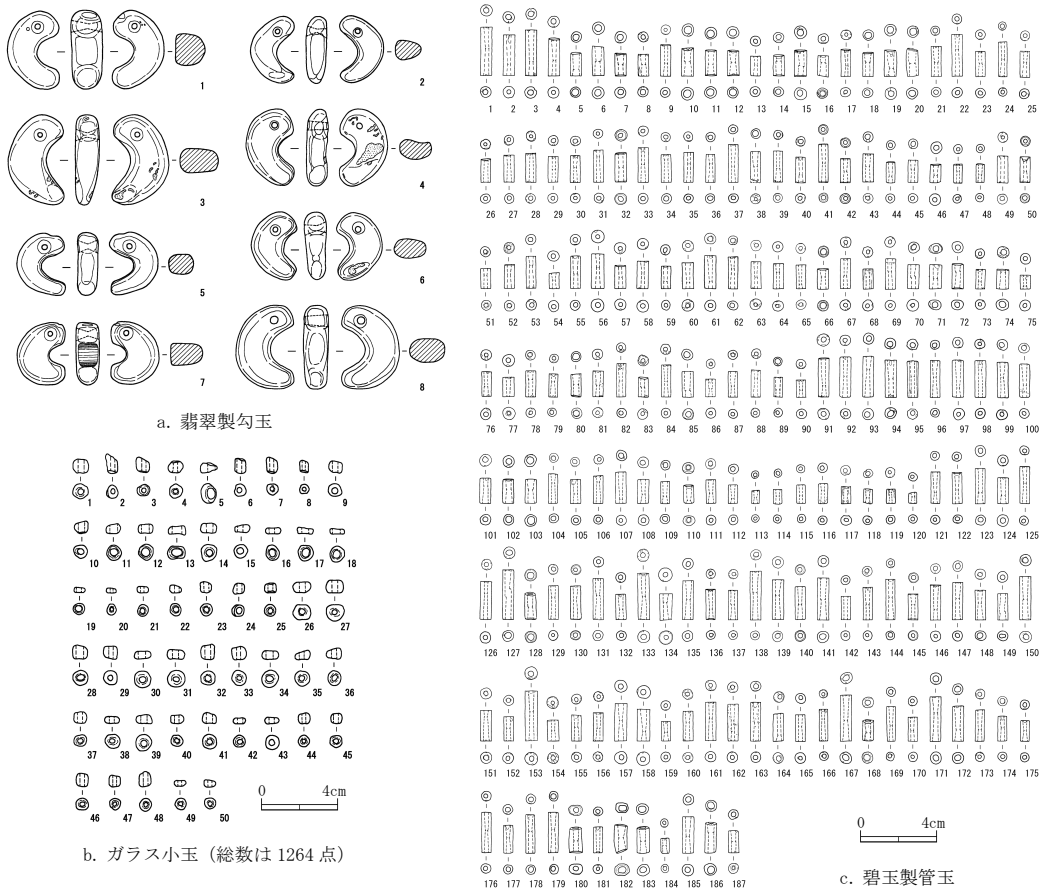


図3 芝ヶ原古墳出土玉類

副葬品となるので一部を除き（広瀬 2002）、それほど重要視はされていなかった。しかし、翡翠、碧玉、ガラスがセットで副葬されるのは、畿内地域においては、実はこの芝ヶ原古墳が最古例なのである。また、各種の玉類をそれぞれみても、これほど大量に副葬されることは畿内地域では稀である。

そこで、本稿では玉類の検討から芝ヶ原古墳の重要性を模索すると同時に、弥生時代終末期から古墳時代初期の玉類の流通について考えてみたい。なお、資料の整理と提供については小泉裕司（城陽市教育委員会）、理化学的分析については藁科哲男（遺物材料研究所）、田村朋美（奈良文化財研究所）、考古学的考察については中村大介（埼玉大学教養学部）が行った。

2. 芝ヶ原古墳出土玉類の理化学的分析結果

理化学的分析と産地同定については、すでに、報告書に筆者らが提示しているが（中村・藁科・

田村 2014）、報告後に新たに分析した内容もあるため（藁科・田村・中村・小泉 2014）、再度、結果を中心に記述しておきたい。

(1) 翡翠製勾玉の産地

翡翠はミャンマー産と新潟県糸魚川産の区別が付き難い場合が多いが、確実にミャンマー産であることを否定できる資料が、8 点中 6 点あった。残り 2 点はミャンマー産と重複する領域に入っており（図 4-A）、他の資料とは異なって透明度がなく、片面穿孔で孔が開けられている（図 3-a・4・8）。ただし、総合判定（図 4）では全て糸魚川産である。現状では、透明度の高い資料ほどミャンマー産から外れるようである。

(2) 碧玉製管玉の産地と遺物群

芝ヶ原古墳出土管玉に蛍光 X 線分析と ESR 分析を行ったところ、「芝ヶ原 A 群」、「芝ヶ原 B 群」、「芝ヶ原 C 群」、「未定 C 群」、「新徳村 B 群」といった産地の異なる遺物群が確認された（図 5）。その比率は、芝ヶ原 A 群 84 点、芝ヶ

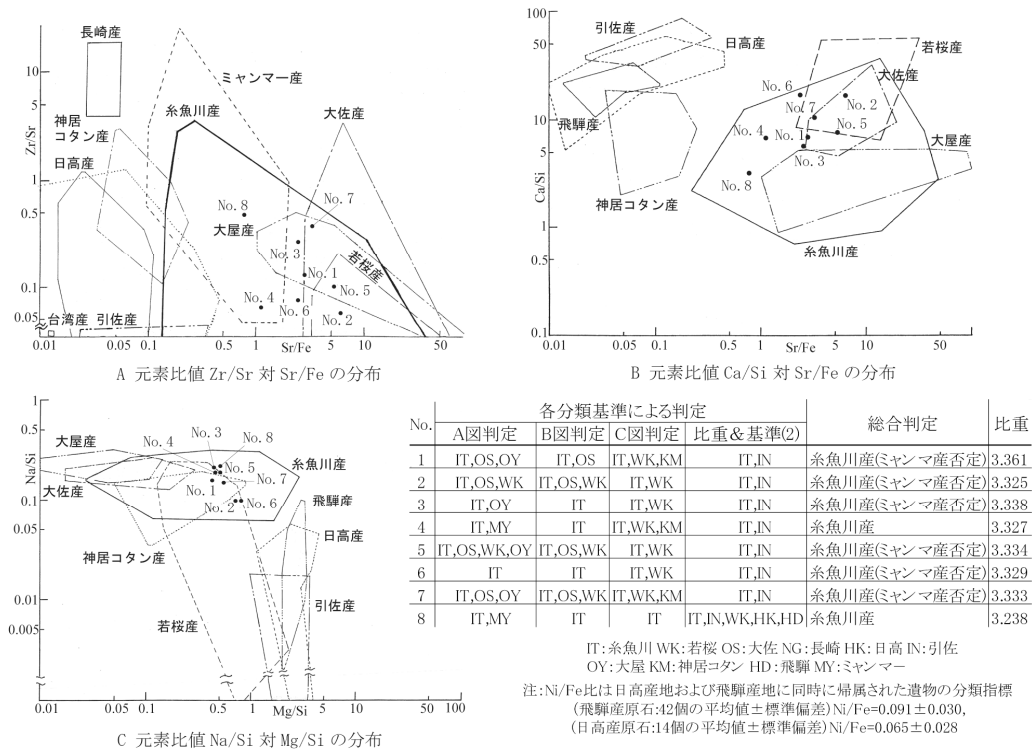


図 4 芝ヶ原古墳出土翡翠の元素比値の分布と産地同定結果(翡翠 No. は図 3-a に対応)

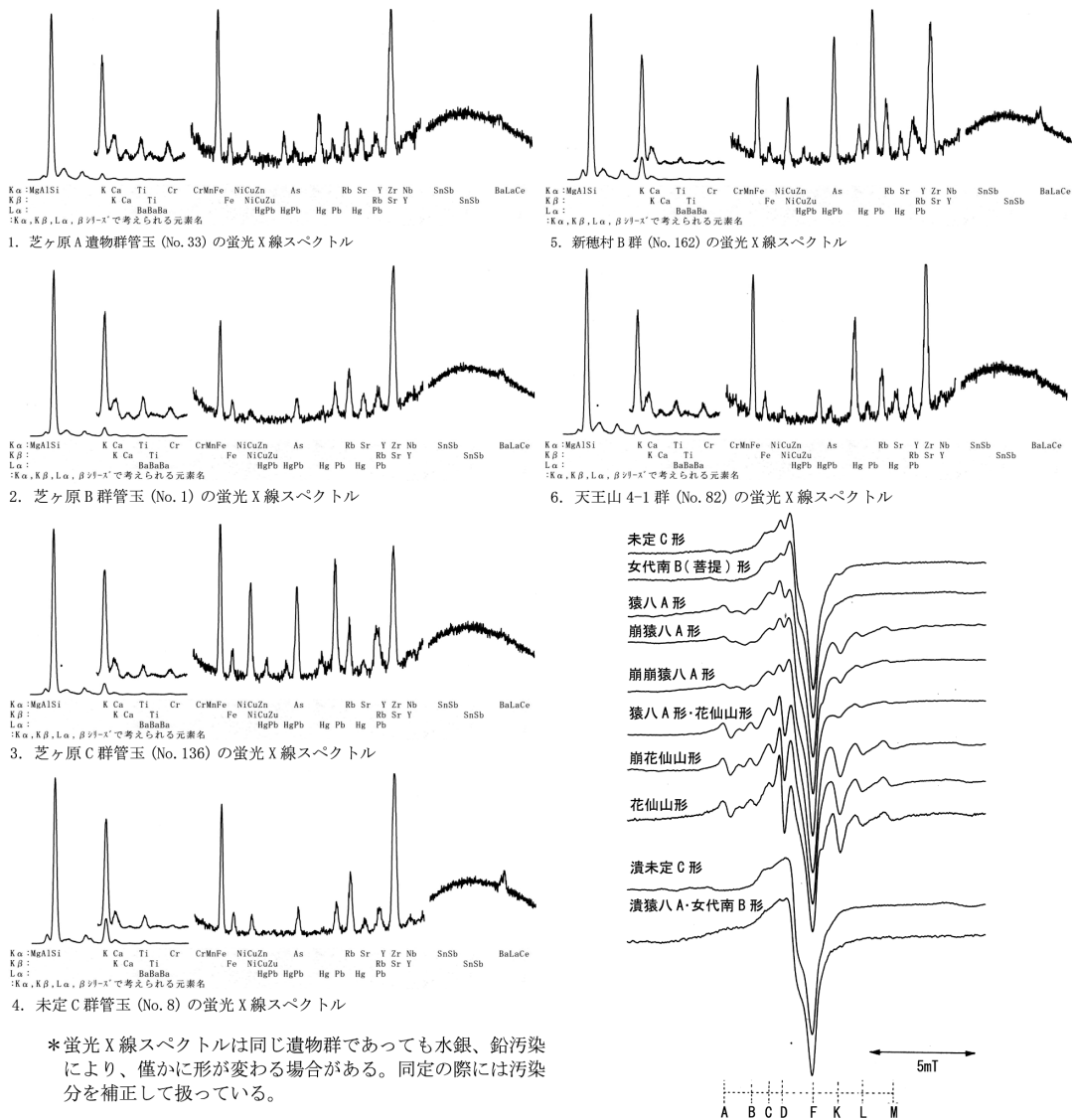


図5 芝ヶ原古墳出土管玉のXRF及びESRスペクトル

原B群60点、芝ヶ原C群3点、未定C群28点、新穂村B群2点であり(表1)、そのほか判定を保留したものがある。各遺物群には厳密に言えば、碧玉だけではなく、緑色凝灰岩が混じっている。

緑色凝灰岩は、碧玉を核とすると、その外殻に形成され、両者は同じ岩脈に存在する。外観から碧玉と判断されるものは、一般的には比重2.4前後以上であり、それ以下のものが緑色凝

灰岩とされる場合が多い。しかし、比重が2.0に近いものでも表面が滑らかで濃い緑色をもつものが混じるのも事実であり、これも碧玉とされることがある。考古学的には、緻密さがなく、淡緑色でやや軟質のものを緑色凝灰岩として区別しているが、遺物群や同一産地と判定されるものにも、碧玉と緑色凝灰岩は混じり合う場合が多いので、厳格に区別する必要は産地同定においては無い。ただし、比重の分布は、今回

表1-1 芝ヶ原古墳出土管玉の原産地判定(No. は図3-cに対応)

No.	ホテリングT2 検定結果	ESR信号形	総合判定	比重	重量(g)
1	芝ヶ原B遺物群(46%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.358	0.169
2	芝ヶ原A遺物群(11%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.06	0.128
3	芝ヶ原B遺物群(17%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.193	0.139
4	芝ヶ原B遺物群(56%), 芝ヶ原A遺物群(0.4%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.012	0.118
5	未定C遺物群(61%), 車塚2遺物群(4%), 車塚1遺物群(0.1%)	未定C形	未定C遺物群	2.257	0.073
6	未定C遺物群(58%), 車塚2遺物群(28%), 車塚1遺物群(1%)	未定C形	未定C遺物群	2.378	0.118
7	未定C遺物群(37%), 車塚2遺物群(2%), 車塚1遺物群(0.1%)	未定C形	未定C遺物群	2.436	0.080
8	未定C遺物群(86%), 車塚2遺物群(47%), 車塚1遺物群(5%)	未定C形	未定C遺物群	2.368	0.081
9	芝ヶ原B遺物群(0.6%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.481	0.098
10	未定C遺物群(84%), 車塚2遺物群(48%), 車塚1遺物群(30%)	未定C形	未定C遺物群	2.109	0.113
11	未定C遺物群(61%), 車塚2遺物群(43%)	未定C形	未定C遺物群	2.247	0.097
12	未定C遺物群(40%), 車塚2遺物群(2%)	未定C形	未定C遺物群	2.396	0.094
13	芝ヶ原B遺物群(2%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.48	0.069
14	未定C遺物群(96%), 車塚2遺物群(10%)	未定C形	未定C遺物群	2.552	0.068
15	未定C遺物群(25%), 車塚2遺物群(9%)	未定C形	未定C遺物群	2.311	0.110
16	未定C遺物群(57%), 菜畑遺物群(5%), 新穂村B遺物群(0.2%)	未定C形	未定C遺物群	2.568	0.063
17	芝ヶ原B遺物群(6%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.522	0.091
18	車塚2遺物群(42%), 未定C遺物群(3%)	未定C形	未定C遺物群	2.406	0.087
19	未定C遺物群(49%), 車塚2遺物群(28%), 車塚1遺物群(2%)	未定C形	未定C遺物群	2.336	0.101
20	未定C遺物群(42%), 車塚1遺物群(1%), 車塚2遺物群(0.3%)	未定C形	未定C遺物群	2.379	0.096
21	芝ヶ原A遺物群(15%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.822	0.062
22	芝ヶ原B遺物群(75%)	崩猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.186	0.078
23	芝ヶ原B遺物群(85%)	猿八A・花仙山形	芝ヶ原B遺物群	2.011	0.064
24	芝ヶ原B遺物群(72%), 阿尾島田1遺物群(0.2%)	猿八A・花仙山形	芝ヶ原B遺物群	2.076	0.131
25	芝ヶ原A遺物群(11%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.797	0.059
26	芝ヶ原B遺物群(94%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.019	0.061
27	芝ヶ原A遺物群(22%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.907	0.075
28	芝ヶ原A遺物群(8%), 天王山4-1遺物群(2%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.986	0.079
29	芝ヶ原B遺物群(75%)	崩猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.181	0.067
30	芝ヶ原B遺物群(96%)	崩猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.203	0.070
31	芝ヶ原A遺物群(71%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.933	0.074
32	未定C遺物群(96%), 車塚2遺物群(2%)	未定C形	未定C遺物群	2.41	0.108
33	芝ヶ原A遺物群(76%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.014	0.098
34	芝ヶ原B遺物群(92%)	猿八A・花仙山形	芝ヶ原B遺物群	2.171	0.063
35	芝ヶ原B遺物群(0.7%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.455	0.091
36	芝ヶ原B遺物群(79%)	花仙山形	芝ヶ原B遺物群	2.136	0.066
37	芝ヶ原B遺物群(55%)	猿八A・花仙山形	芝ヶ原B遺物群	1.941	0.077
38	芝ヶ原B遺物群(53%)	猿八A・花仙山形	芝ヶ原B遺物群	1.972	0.062
39	芝ヶ原B遺物群(85%)	猿八A・花仙山形	芝ヶ原B遺物群	2.147	0.069
40	芝ヶ原A遺物群(67%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.723	0.059
41	芝ヶ原B遺物群(76%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.262	0.087
42	芝ヶ原B遺物群(2%), 新穂村B遺物群(0.1%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.446	0.075
43	芝ヶ原B遺物群(66%), 阿尾島田1遺物群(0.3%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.193	0.077
44	芝ヶ原A遺物群(43%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.081	0.045
45	芝ヶ原A遺物群(13%) 天王山4-1遺物群(9%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.214	0.054
46	芝ヶ原B遺物群(53%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.204	0.068
47	芝ヶ原B遺物群(36%)	崩猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.443	0.049
48	芝ヶ原A遺物群(32%) 天王山4-1遺物群(6%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.163	0.040
49	芝ヶ原A遺物群(40%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.862	0.067
50	新穂村A遺物群(7%)	女代南B形	芝ヶ原A遺物群	2.145	0.073
51	芝ヶ原A遺物群(53%) 芝ヶ原B遺物群(6%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.035	0.047
52	芝ヶ原B遺物群(26%) 芝ヶ原A遺物群(17%)	崩猿八A形	芝ヶ原B遺物群, 芝ヶ原A遺物群	2.062	0.061
53	芝ヶ原B遺物群(66%)	崩花仙山形	芝ヶ原B遺物群	1.959	0.086
54	芝ヶ原B遺物群(64%)	崩猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.435	0.044
55	芝ヶ原A遺物群(57%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.795	0.066
56	芝ヶ原A遺物群(37%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.001	0.134
57	芝ヶ原B遺物群(86%)	崩猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.165	0.073
58	芝ヶ原A遺物群(7%), 芝ヶ原B遺物群(2%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.278	0.098
59	新穂村A遺物群(10%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.2	0.047
60	芝ヶ原C遺物群(46%), 菩提-1(0.3%)	女代南B形	芝ヶ原C遺物群・菩提-1	2.339	0.098
61	芝ヶ原A遺物群(87%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.937	0.108
62	芝ヶ原B遺物群(95%)	崩花仙山形	芝ヶ原B遺物群	2.032	0.068
63	芝ヶ原A遺物群(74%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.748	0.068
64	芝ヶ原B遺物群(6%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.258	0.078
65	芝ヶ原A遺物群(72%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.839	0.053
66	未定C遺物群(91%), 車塚2遺物群(87%)	未定C形	未定C遺物群	2.457	0.068
67	芝ヶ原A遺物群(91%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.947	0.085
68	芝ヶ原B遺物群(19%)	花仙山形	芝ヶ原B遺物群	2.251	0.069
69	芝ヶ原A遺物群(92%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.92	0.085
70	芝ヶ原A遺物群(67%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.941	0.070
71	未定C遺物群(12%), 車塚2遺物群(6%)	未定C形	未定C遺物群	2.292	0.086
72	未定C遺物群(59%), 車塚2遺物群(2%)	未定C形	未定C遺物群	2.365	0.086
73	芝ヶ原B遺物群(42%)	崩猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.43	0.047
74	未定C遺物群(30%), 車塚1遺物群(0.9%), 車塚2遺物群(0.2%)	未定C形	未定C遺物群	2.312	0.065
75	芝ヶ原A遺物群(45%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.932	0.037
76	芝ヶ原A遺物群(56%), 芝ヶ原B遺物群(31%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群, 芝ヶ原B遺物群	2.068	0.053
77	芝ヶ原A遺物群(96%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.887	0.054
78	芝ヶ原B遺物群(33%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.219	0.064
79	芝ヶ原B遺物群(90%)	花仙山形	芝ヶ原B遺物群	2.228	0.040
80	未定C遺物群(76%), 車塚2遺物群(35%), 車塚1遺物群(2%)	未定C形	未定C遺物群	2.431	0.067
81	芝ヶ原A遺物群(40%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.957	0.064
82	天王山4-1遺物群(88%), 芝ヶ原A遺物群(2%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.914	0.070
83	芝ヶ原A遺物群(68%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.915	0.048
84	芝ヶ原A遺物群(57%), 芝ヶ原B遺物群(13%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群, 芝ヶ原B遺物群	2.036	0.073
85	未定C遺物群(45%), 新穂村B遺物群(0.2%)	未定C形	未定C遺物群	2.092	0.088
86	芝ヶ原A遺物群(32%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.942	0.036
87	芝ヶ原A遺物群(83%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.823	0.052
88	芝ヶ原B遺物群(72%) 阿尾島田1遺物群(2%)	崩猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.059	0.059
89	芝ヶ原B遺物群(55%)	崩花仙山形	芝ヶ原B遺物群	2.058	0.034
90	芝ヶ原A遺物群(53%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.093	0.036
91	芝ヶ原A遺物群(25%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.95	0.110
92	芝ヶ原B遺物群(6%)	未定C形	芝ヶ原B遺物群	2.193	0.106
93	芝ヶ原A遺物群(43%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.954	0.122

表1-2 芝ヶ原古墳出土管玉の原産地判定(No. は図3-cに対応)

94	芝ヶ原A遺物群(50%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.984	0.094
95		女代南B形		2.113	0.098
96	芝ヶ原B遺物群(21%)	崩花仙山形	芝ヶ原B遺物群	2.021	0.083
97	芝ヶ原A遺物群(95%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.138	0.156
98		猿八A形		2.117	0.1
99	芝ヶ原A遺物群(70%)	崩崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.962	0.108
100	芝ヶ原A遺物群(14%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.869	0.075
101	芝ヶ原A遺物群(0.5%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.931	0.097
102		女代南B形		2.109	0.075
103		未定C形		2.126	0.082
104	芝ヶ原C遺物群(35%), 女代南B遺物群(0.3%)	女代南B形	芝ヶ原C遺物群・女代南B遺物群	2.352	0.078
105	芝ヶ原A遺物群(58%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.969	0.059
106	芝ヶ原A遺物群(21%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.096	0.078
107	芝ヶ原A遺物群(93%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.226	0.109
108	芝ヶ原A遺物群(27%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.89	0.063
109	芝ヶ原A遺物群(2%)	崩花仙山形	芝ヶ原A遺物群	2.057	0.052
110	未定C遺物群(2%)	未定C形	未定C遺物群	2.317	0.055
111		女代南B形		2.028	0.053
112	芝ヶ原A遺物群(2%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.251	0.055
113	芝ヶ原A遺物群(4%)	崩崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.062	0.026
114	芝ヶ原A遺物群(11%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.228	0.030
115	芝ヶ原B遺物群(24%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.23	0.045
116	芝ヶ原A遺物群(27%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.969	0.048
117	芝ヶ原A遺物群(70%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.069	0.041
118	芝ヶ原A遺物群(41%)	崩崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.993	0.033
119	芝ヶ原A遺物群(7%)	崩崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.98	0.028
120	芝ヶ原B遺物群(8%)	崩猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.24	0.023
121	芝ヶ原B遺物群(62%)	崩崩猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.519	0.100
122	未定C遺物群(10%), 芝ヶ原B遺物群(6%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.507	0.103
123	芝ヶ原A遺物群(0.1%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.028	0.121
124	芝ヶ原A遺物群(18%)	崩崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.28	0.077
125	芝ヶ原A遺物群(73%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.953	0.091
126	芝ヶ原B遺物群(37%) 芝ヶ原A遺物群(5%), 未定C遺物群(0.3%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群・芝ヶ原A遺物群	2.126	0.127
127		崩猿八A形		2.229	0.154
128	未定C遺物群(9%), 車塚2遺物群(0.3%)	未定C形	未定C遺物群	2.376	0.104
129	芝ヶ原A遺物群(77%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.943	0.088
130	芝ヶ原B遺物群(19%) 新穂村B遺物群(0.1%)	崩猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.364	0.108
131	芝ヶ原A遺物群(99%)	崩崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.969	0.124
132	芝ヶ原A遺物群(85%)	崩崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.836	0.074
133		潰女代南B形		2.096	0.191
134	芝ヶ原A遺物群(88%)	崩崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.919	0.112
135	芝ヶ原A遺物群(80%) 阿尾島田1遺物群(0.6%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.973	0.117
136	芝ヶ原C遺物群(57%)	女代南B形	芝ヶ原C遺物群	2.234	0.069
137	芝ヶ原B遺物群(13%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.434	0.077
138	芝ヶ原B遺物群(50%) 芝ヶ原A遺物群(47%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群・芝ヶ原A遺物群	1.914	0.137
139	芝ヶ原A遺物群(64%), 芝ヶ原B遺物群(22%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群・芝ヶ原B遺物群	2.022	0.129
140	芝ヶ原A遺物群(68%)	崩崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.006	0.095
141	芝ヶ原A遺物群(21%), 芝ヶ原B遺物群(0.1%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群・芝ヶ原B遺物群	1.88	0.123
142	芝ヶ原A遺物群(27%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.884	0.047
143	芝ヶ原B遺物群(11%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.254	0.087
144	芝ヶ原B遺物群(97%)	崩花仙山形	芝ヶ原B遺物群	2.112	0.081
145	芝ヶ原B遺物群(80%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.234	0.070
146	芝ヶ原A遺物群(87%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.912	0.092
147	芝ヶ原B遺物群(43%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.164	0.114
148	芝ヶ原B遺物群(16%)	花仙山形	芝ヶ原B遺物群	2.109	0.074
149	芝ヶ原A遺物群(28%), 天王山4-1遺物群(0.8%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.115	0.068
150	芝ヶ原B遺物群(5%)	崩崩猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.049	0.135
151	芝ヶ原A遺物群(85%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.936	0.086
152	芝ヶ原B遺物群(82%), 阿尾島田1遺物群(27%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	1.945	0.070
153	芝ヶ原A遺物群(77%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.876	0.166
154	芝ヶ原A遺物群(43%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.752	0.056
155	芝ヶ原A遺物群(77%)	崩崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.917	0.058
156	芝ヶ原A遺物群(68%), 天王山4-1遺物群(26%), 阿尾島田1遺物群(0.2%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.769	0.067
157	芝ヶ原A遺物群(43%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.89	0.130
158	芝ヶ原A遺物群(99%)	崩崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.92	0.136
159	芝ヶ原B遺物群(34%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.395	0.052
160	芝ヶ原A遺物群(84%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.793	0.072
161	芝ヶ原A遺物群(84%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.834	0.105
162	新穂村B遺物群(36%)	猿八A形	新穂村B遺物群	2.415	0.121
163	芝ヶ原B遺物群(49%) 芝ヶ原A遺物群(5%), 天王山4-1遺物群(0.4%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	1.927	0.096
164	未定C遺物群(18%), 車塚2遺物群(11%)	未定C形	未定C遺物群	2.366	0.098
165	芝ヶ原A遺物群(83%), 芝ヶ原B遺物群(10%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群・芝ヶ原B遺物群	1.962	0.077
166	芝ヶ原A遺物群(89%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.973	0.063
167	芝ヶ原B遺物群(74%)	崩猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.269	0.165
168	未定C遺物群(24%), 車塚2遺物群(0.4%)	未定C形	未定C遺物群	2.454	0.083
169	芝ヶ原A遺物群(59%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	2.001	0.069
170		女代南B形		2.072	0.063
171	芝ヶ原A遺物群(8%)	崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.858	0.136
172	芝ヶ原A遺物群(59%), 芝ヶ原B遺物群(4%)	崩崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群・芝ヶ原B遺物群	1.977	0.109
173	芝ヶ原A遺物群(12%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.853	0.079
174	芝ヶ原B遺物群(66%)	崩花仙山形	芝ヶ原B遺物群	2.078	0.061
175	新穂村B遺物群(0.6%), 菩提-1(0.3%)	潰猿八・女代南B形	新穂村B遺物群	2.312	0.056
176	芝ヶ原A遺物群(91%)	崩崩猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.871	0.114
177	芝ヶ原A遺物群(85%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.881	0.053
178	芝ヶ原B遺物群(53%)	崩花仙山形	芝ヶ原B遺物群	2.2	0.090
179	芝ヶ原A遺物群(61%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.888	0.092
180	未定C遺物群(26%), 車塚2遺物群(18%)	未定C形	未定C遺物群	2.364	0.101
181	芝ヶ原A遺物群(87%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.918	0.051
182	未定C遺物群(9%)	未定C形	未定C遺物群	2.364	0.110
183	未定C遺物群(2%)	未定C形	未定C遺物群	2.192	0.095
184	芝ヶ原A遺物群(74%)	猿八A形	芝ヶ原A遺物群	1.926	0.031
185	芝ヶ原B遺物群(72%)	崩崩猿八A形	芝ヶ原B遺物群	1.938	0.124
186	未定C遺物群(51%), 車塚2遺物群(9%)	未定C形	未定C遺物群	2.252	0.087
187	芝ヶ原B遺物群(39%)	猿八A形	芝ヶ原B遺物群	2.143	0.066

同定された遺物群ごとに差異があるため、その点は示しておきたい。

図 6-1~4 には各遺物群の比重分布を示してある。まず、芝ヶ原 A 群は比重 2.0 前後に分布のまとまりがある。芝ヶ原 B 群は比重 2.0~2.4 の間と比重 2.4 以上の二つに分布にまとまりがあり、未定 C 群は比重 2.4 前後にまとまる。つまり、これらの遺物群は比重をみても異なるまとまりをもつものであることが理解されよう。芝ヶ原 C 群については 3 点のみであるが、比重においては未定 C 群に近い。

長さとの比率からこれらの遺物群をみると(図 6-5~10)、芝ヶ原 A 群と芝ヶ原 B 群は、それほど差異はなく、このサイズ分布のなかに、全ての遺物群がおさまる。ただし、未定 C 群はより集中した分布のまとまりがみられる。また、芝ヶ原 A 群 4 点、芝ヶ原 B 群 2 点には片面穿孔がみられ、これらが北陸地方か出雲地域で加工されたことを示している。未定 C 群は、これまで確認された資料は全て両面穿孔であり(大賀 2010)、芝ヶ原古墳の資料においてもそれは変わらない。

以上の内容を整理すると、芝ヶ原古墳出土の碧玉製管玉は、類似したサイズのものが地域を問わず集められたといえよう。比重の差異や原産地ではなく、サイズが重要だったといえる。なお、芝ヶ原 A 群、B 群の原石産地はみつかっていないが、ESR の結果が猿八形であることが多いことから、北陸の小さな産地である可能性がある。

(3) ガラス小玉の分析

顕微鏡観察、コンピューテッドラジオグラフィ法(CR法)、オートラジオグラフィ法(AR法)、蛍光 X 線分析を用いて分析したところ、1264 点全てが、カリガラスで引き伸ばし法によって製作されたものであると判明した(中村・藁科・田村 2014)。いわゆるインド・パシフィ

ックビーズであり、少なくとも日本列島産ではない。

3. 玉類の産地と流通

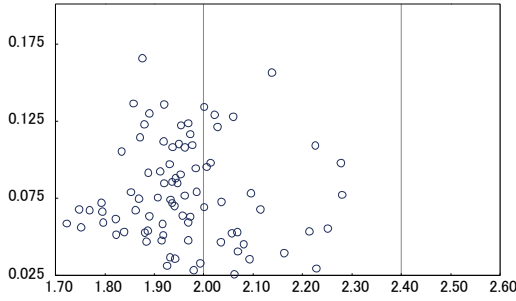
前章の理化学的分析の結果を受けて、考古学的脈絡から玉類の流通について考えてみたい。

(1) 翡翠

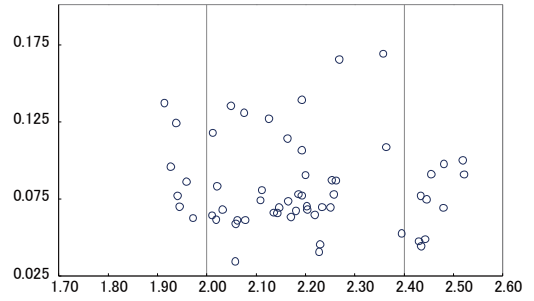
先史時代において利用された翡翠は、基本的に新潟県糸魚川産のみである。縄文時代晩期までは東北地方にその多くが流通し、弥生時代開始後は主に北部九州で翡翠製勾玉として流通するようになる。特に唐津平野で多くの副葬例が確認されている。畿内地域の唐古・鍵遺跡などでも大型の翡翠製勾玉が集落から出土しているが、数量的には多くなく、副葬品にはならない。

翡翠の流通の大きな変化は、弥生時代後期後半におこる。岡山平野(吉備地域)に翡翠が継続的に副葬されるようになり(図 7-8~12)、唐津平野以外に集中地域ができる。畿内地域については、芝ヶ原古墳の事例がやはり最古級である。大型品ではないが、透明度の高いものを含む翡翠製勾玉が 8 点も副葬される事例は、芝ヶ原古墳を除き、西日本の弥生時代にはみられず、芝ヶ原古墳の重要性を物語っている。

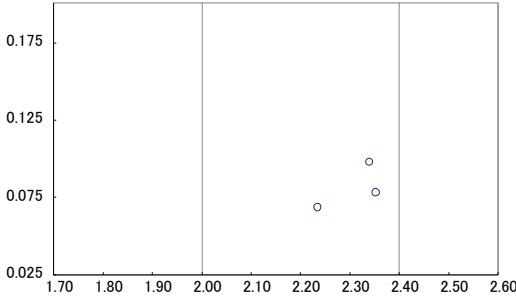
一方、翡翠の加工については、佐賀平野の吉野ヶ里遺跡で擦切りされた切片が 1 点みられ、北部九州でも最終調整のようなことは行われていたようである。しかし、翡翠を原石から加工した工房は、北部九州になく、やはり原産地のある北陸地域に限られる。北陸地方西部の福井県林・藤島遺跡の工房では片面穿孔で製作された翡翠製勾玉があり(図 7-14)、芝ヶ原遺跡の透明度の低い 2 点の翡翠製勾玉もまた、片面穿孔である。その 2 点の孔の径は、図 3-a-8 が径 3.1~2.1 mm、図 3-a-4 が径 2.45~1.75 mm である。弥生時代後期後葉の岡山県榑築墳丘墓の翡翠製勾玉の孔が径 7~5 mm、前述の林・藤島出土資



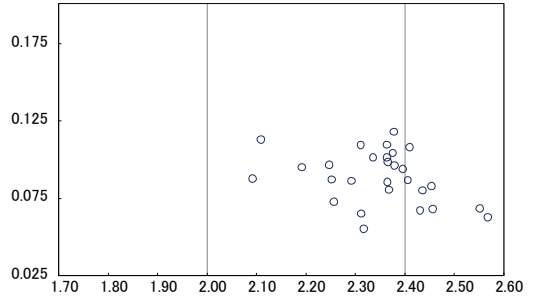
1. 芝ヶ原A群の重量と比重(縦:重量(g) 横:比重)



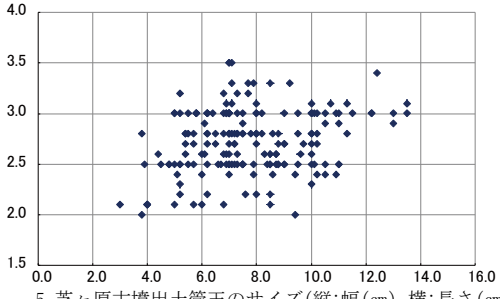
2. 芝ヶ原B群の重量と比重(縦:重量(g) 横:比重)



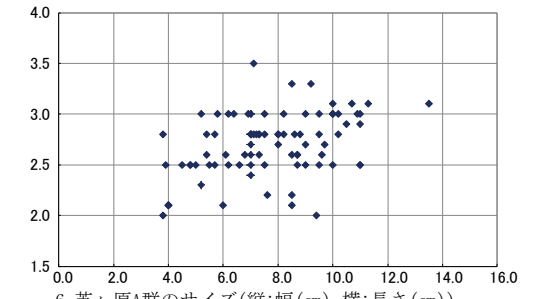
3. 芝ヶ原C群の重量と比重(縦:重量(g) 横:比重)



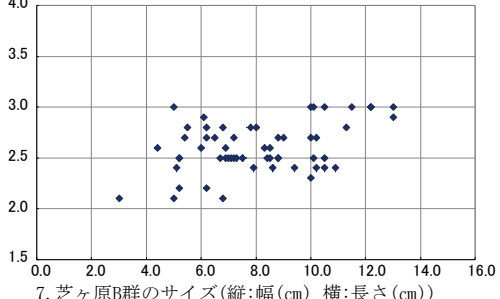
4. 未定C群の重量と比重(縦:重量(g) 横:比重)



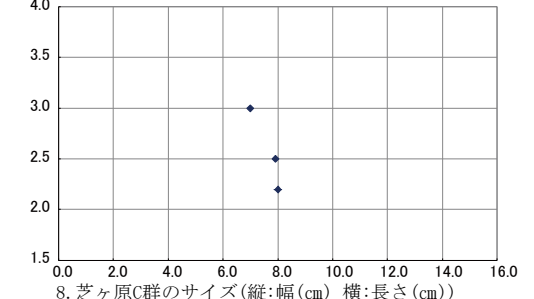
5. 芝ヶ原古墳出土管玉のサイズ(縦:幅(cm) 横:長さ(cm))



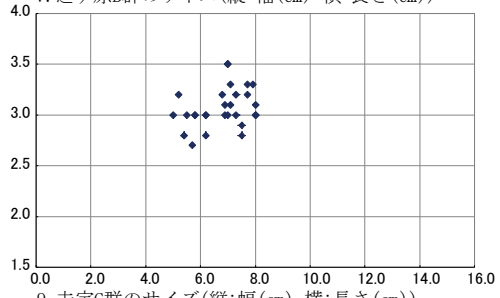
6. 芝ヶ原A群のサイズ(縦:幅(cm) 横:長さ(cm))



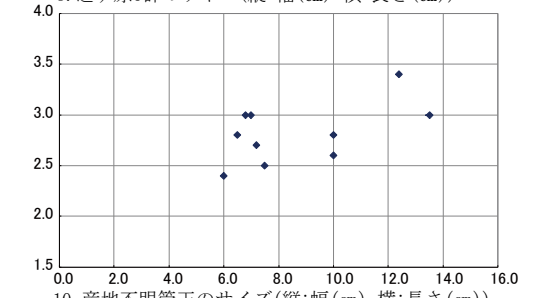
7. 芝ヶ原B群のサイズ(縦:幅(cm) 横:長さ(cm))



8. 芝ヶ原C群のサイズ(縦:幅(cm) 横:長さ(cm))



9. 未定C群のサイズ(縦:幅(cm) 横:長さ(cm))



10. 産地不明管玉のサイズ(縦:幅(cm) 横:長さ(cm))

図6 碧玉製管玉の比重分布とサイズ(藁科哲男作成)

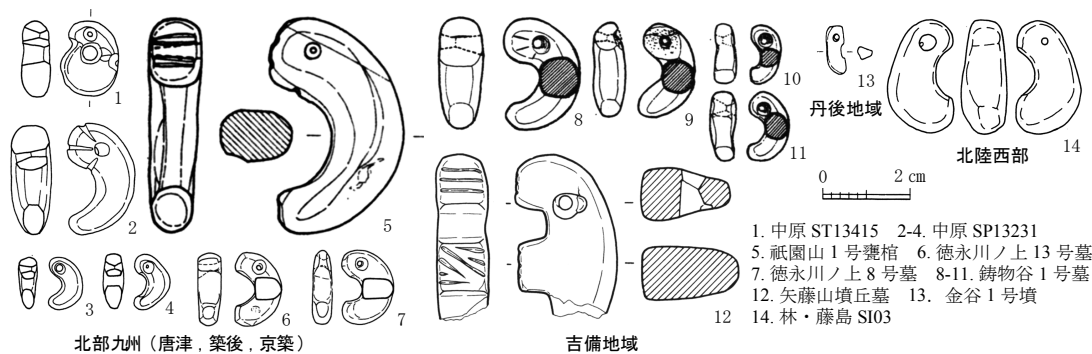


図7 弥生時代終末期から古墳時代初頭の翡翠製勾玉

料の孔の径が3.5~1.6mmであるので、同じ片面穿孔でも後者の事例に近い。

ところで、南山城地域では近江系土器がよくみられ、芝ヶ原古墳からも近江系土器が出土している(図2-5)。林・藤島遺跡をはじめとする北陸地方西部でも近江系土器がよくみられることから、翡翠は北陸地方から近江地域を通じてもたらされたと推定されよう。

(2) 碧玉製管玉

碧玉製管玉は弥生時代の開始とともに日本列島に出現し、その後1000年以上愛好される。最初は朝鮮半島産と考えられる「未定C群」碧玉が流通し、弥生時代中期には北陸地方で「菩提産」碧玉が開発され、西日本全体に流通するようになる。

畿内地域でも菩提産をはじめとする北陸地方の碧玉で玉作りをしており、碧玉製管玉が装身具として愛好されていたことは確かである。しかし、尼崎市田能遺跡で600点以上の管玉が副葬されていた事例以外は、墓の副葬品としての事例は極めて乏しい。従って、碧玉製管玉の

副葬においても、芝ヶ原古墳には重要な意味がある。

西日本に流通していた碧玉については、弥生時代中期から菩提産と未定C群が主体を占めていたようである(図8)。前述した弥生時代中期後葉の田能遺跡では、出土した632点の管玉のうち、200点が分析され(藁科・金・中村・魯2013)、75点が未定C群、55点が菩提産、70点が田能諸遺物群及びその他であった。原産地或いは広域流通が確認されている遺物群としては、やはり菩提産と未定C群が主体といえ、西日本の東西で共通している。

しかし、翡翠と同様に、弥生時代後期後葉になると、この碧玉流通に変化がおこる。北部九州では菩提産が激減し(図8)、山陰地方でも青谷上寺地遺跡で、中期に流通していた菩提産碧玉が、後期以降には激減するという指摘がある(河合2013)。北部九州の唐津平野の中原遺跡では菩提産が再び終末期に復活するが、同時期の芝ヶ原古墳では菩提産はない。

芝ヶ原古墳から出土した芝ヶ原A群や芝ヶ原B群などの詳細な産地は不明である。しかし、これらの管玉は、北陸の小さな産地からの資料と推定される北九州市蒲生石棺墓群37号墓資料と類似したサイズをもつ(図9)。また、前述したように、芝ヶ原A群と芝ヶ原B群には片面穿孔が混じり、ESRも北陸地方と関連する猿八

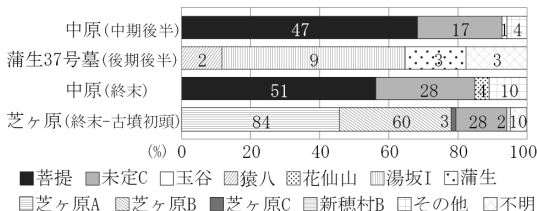
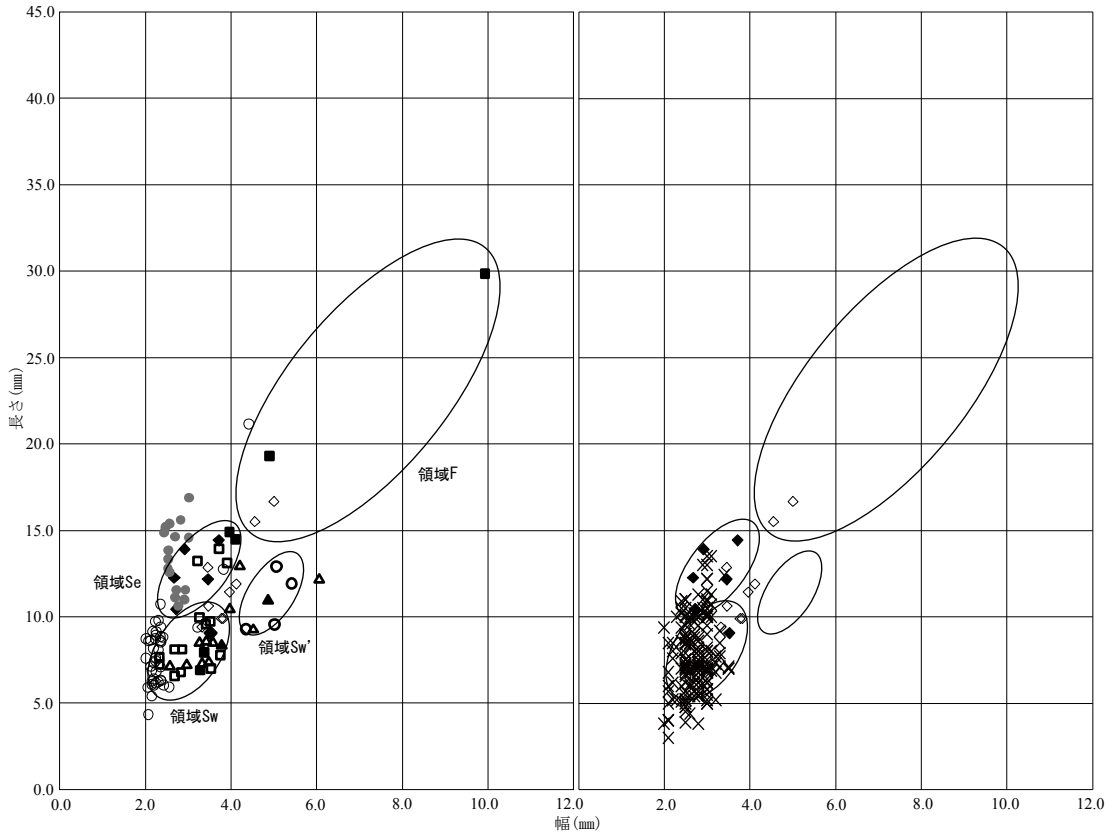


図8 碧玉原産地の差異



○西日本(I期前半) □西日本(III~IV期) ○蒲生石棺群32号墓(北九州市) *大賀克彦2009「第2章山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究』,山口信義・中村利至久
 △西日本(I期後半~II期) ■東日本(III~IV期) ●蒲生石棺群34・44・68号墓 「第3節副葬玉類」『蒲生石棺墓群』に芝ヶ原古墳のデータを足して作成
 ▲東日本(I期後半~II期) ◇西日本(V~VI期) ○蒲生石棺群37号墓
 ◆東日本(V~VI期) ×芝ヶ原古墳(城陽市)

図9 弥生時代の碧玉製管玉のサイズと芝ヶ原古墳出土資料

形が多い。こうした様相を考慮すると、芝ヶ原古墳の碧玉の多くは、北陸地方の大産地である菩提産とは異なる、同地方の小さな産地のものである可能性が高いといえよう。

弥生時代後期後葉には丹後地域の大風呂南1号墓で356点の碧玉製管玉が出土しており、この地域に菩提産が集められていた可能性がある。その場合、弥生時代後期後葉における各地の政体の成長が碧玉の流通にも影響したことになる。とはいえ、上記の想定は、丹後地域の理化学的分析の実施例が少ないため、現時点では明確にしない。この点については、今後の課題といえる。

一方、古墳時代前期前半の菩提産の碧玉流通

がどのような状況であったのかは明確にはない。石製腕飾類に使用されるようであるが(北條2013)、理化学的分析がほとんどなされていない状況にある。菩提産を含む北陸地方の碧玉利用は弥生時代後期後葉から古墳時代前期の動態を知るうえでも重要であるので、これについても理学的分析を進めていく必要があるだろう。

(3) ガラス小玉

ガラスについては、鉛バリウムガラス、カリガラス、ソーダ石灰ガラス等の種類が知られる。芝ヶ原古墳のガラス小玉は全て小型のカリガラスであり、原産地は東南アジアもしくはインドと推定されている(肥塚・田村・大賀2010)。

弥生時代後期以降、各地で数百点～千を超える量のガラス小玉が副葬されるようになるが、畿内地域で千点を超えるガラス小玉が副葬されるのは芝ヶ原古墳が最初であり、他の玉類と同様に芝ヶ原古墳の重要性を示す。

古墳時代初頭になると淀川水系の安満宮山古墳において、1600点以上のガラス小玉が出土し、やはり、カリガラスのみで構成される。吉備地域の矢藤治山古墳でも、50点の小玉の全てがカリガラスである。古墳時代初頭にはカリガラスのみ構成されたガラス小玉が広がるのが指摘されているが（大賀 2003）、時期的にみて芝ヶ原古墳はその端緒であったいえよう。

弥生時代後期には丹後地域で 10000 点を超える数量が出土しており（肥後 2009）、この時期には丹後地域がガラスの流通の結節点になっていたことは確かである。しかし、弥生時代終末期には急速にその勢力は衰え、墳墓が少なくなると同時に、ガラス小玉の数量も激減する。

一方、北陸地方の原目山 1 号墓では 700 点を超えるガラス小玉が副葬されている。山陰地方や但馬地域と共通する長大な鉄刀もみられることから、丹後地域がはずれただけで日本海の鉄器流通にのってガラス小玉がもたらされた可能性も十分にあるが、現時点ではガラスの流通は複雑であり、芝ヶ原古墳の事例を含め、どのようなルートであったのかは明確ではない。なお、終末期の北部九州の玉類はカリガラスのみでなく、ソーダ石灰ガラスが多く含まれるため（田村 2012）、単純に九州地方を経由して各地へ広がるという流通も想定しにくい。

4. 玉類流通網の掌握

これまで、検討してきたように、芝ヶ原古墳から出土した翡翠製勾玉は、形態、製作技法ともに原産地の北陸地方から近江地域を経由してきたとみて間違いはない。芝ヶ原 A 群、芝ヶ原 B

群の碧玉製管玉も同様であろう。そして、未定 C 群碧玉は終末期には日本海側に少ないことから、瀬戸内ルートを通った可能性が高い。ガラス小玉の流通経路については、保留しておくが、他の玉類からみた場合、芝ヶ原古墳は東西からの玉流通の交点に位置しているのである。

弥生時代終末期には瀬戸内の流通ルートが再盛行し、当時の中心地である大和盆地へのルートも河内地域の大和川水系から摂津地域の淀川水系に変わる（福永 2008）。淀川の支流である木津川の地殻に位置する芝ヶ原古墳もまたこの時流にのっていたことが推定される。芝ヶ原古墳の近隣に位置する下主水遺跡では、近年、木津川に築かれた弥生時代終末期の船着き場や護岸施設が確認されており、水運が発達していたことが判明している。芝ヶ原古墳に副葬されたヤスとみられる鉄器の存在も考慮すると、芝ヶ原古墳の被葬者を支えた背景は水運であったのではないだろうか。

ガラス小玉を大量に副葬していた安満宮山古墳も同様に淀川水系の隆盛に支えられていたとみられる。しかし、芝ヶ原古墳でみられた総合的な玉類の収集力は、実はその後には継続せず、現時点では 50 年以上のちの 3 世紀後葉～末頃まで、畿内地域は、特に北陸地方との関係が途切れる。

摂津地域や大和地域が円丘を志向するのに対し（福永 2008）、南山城地域は方丘を志向し、東海地域との関係が強いともいわれる（岸本 2014）。大量の玉類を保有する芝ヶ原古墳は前方後方墳、安満宮山古墳は長方墳であり、前者は豊富な副葬品を次世代に継承できず、後者は地域内の次世代に全く連続しない。また、芝ヶ原古墳の時期には、玉類は大和盆地まで流通せず、畿内地域では淀川水系でその流通がとまっていた。その後も、大和盆地には流れない。このことは玉類の流通網を邪馬台国や初期の大和

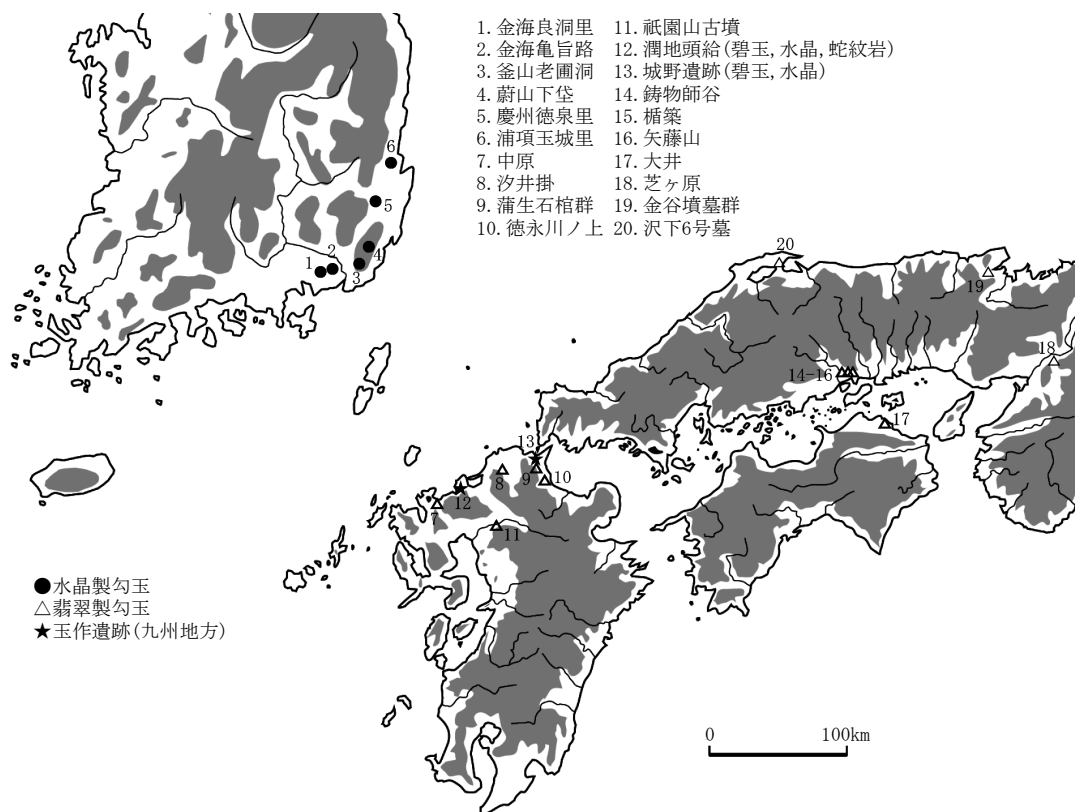


図10 弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の墳墓出土玉類の分布

政権が掌握していたのではないことを示している。

そもそも玉類は地域や時期によって、好まれる種類が異なっており、政体の勢力の強さによって決まるわけではない。例えば、翡翠製勾玉は、弥生時代中期において、最大の政体であった「奴國」（福岡・春日地域）では副葬されず、ガラス勾玉が副葬される。むしろ、同じく漢鏡を多く保有する「伊都國」（糸島地域）で良品が副葬されるほか、漢鏡の保有が劣る「末盧國」（唐津平野）において多く副葬される（木下2014、Nakamura 2014）。翡翠の流通が海浜部を通じてであったためともいえないことはないが、佐賀平野の吉野ヶ里遺跡からも出土するほか、弥生時代終末期から古墳時代初頭には京築平野や筑紫地域でも翡翠製勾玉がみられるよう

になり、内陸にもその流通は及んでいた（図10）。また、奴國では門田B地区15号土壙墓で蛇紋岩製勾玉が副葬されており、階層的に低い墓でも翡翠製勾玉は保有されていない。従って、奴國では、ガラス勾玉の下位に翡翠製勾玉がくるのではなく、翡翠自体が流通していないと可能性が高いのである。

翡翠について同様の状況は、出雲地域でもみられる。この地域最大の墳墓群である西谷墳墓群ではガラス勾玉はみられるが、翡翠は保有しない。しかし、異なる墳墓群に属する規模の小さい沢下6号墓でみられる（図10）。

こうした様相は古墳時代初頭においてもみられ、岡山県殿山墳墓群では勾玉をはじめとする玉類の副葬がみられるにも関わらず、より有力な墳墓である備前車塚には玉類がみられない

(北條 2000)。

さらに、大和政権の中核である大和盆地東南部においては、前述したように南山城地域の芝ヶ原古墳で多くの玉類が入るにもかかわらず、終末期のホケノ山以降、古墳時代初頭の前方後円墳には玉類が入らない。前期後葉～末葉の桜井茶臼山古墳の段階から、ようやく翡翠製勾玉及び、石製腕飾類を含む碧玉製品が副葬されるようになるのである。桜井茶臼山古墳や後続するメスリ山古墳の属する系列は、纏向遺跡周辺の箸墓古墳などの系列とは異なり、より南に位置する。さらに、この系列の属する地域では赤尾熊ヶ谷 2 号墳のように小さな墳墓でも翡翠製勾玉や碧玉製管玉が入る。

従って、桜井茶臼山古墳こそ、北陸地方との流通網の確立という点で画期といえるのである。なお、朝鮮半島に翡翠製勾玉が流通するのは、桜井茶臼山の時期以降であり、それまでは、日本列島に近い地域で、水晶製勾玉を副葬するのみである(図 10、中村 2013)。

『魏志倭人伝』に記述された壹與が献上した朝貢品の中には「青大句珠二枚」があり、翡翠は特に重要視されていた(河村 2010)。しかし、大和王権がこの入手ルートを確認するには紆余曲折があったようである。そして、芝ヶ原古墳の被葬者は、弥生時代終末期に玉類の流通に関与はしていたが、それを保ち続けることはできなかった。大和政権の形成前後における変化の連続には抗えなかったのだろう。

参考文献

- 大賀克彦 2002 「弥生・古墳時代の玉」『考古資料大観』第 9 巻 小学館
- 大賀克彦 2003 「紀元 3 世紀のシナリオ」『風巻神山古墳群』福井県清水町教育委員会
- 大賀克彦 2010 「東大寺山古墳出土玉類の考古学的評価」『東大寺山古墳の研究』東大寺山古墳研究

会・天理大学・天理大学附属天理参考館

- 河村好光 2010 『倭の玉器』青木書店
- 木下尚子 2011 「装身具から威信財へ」『弥生時代の考古学』同成社
- 木下尚子 2014 「玉と結びの装身具・勾玉にみる日本的なもの」『装身具とアジアの古代社会講演資料』アジア考古学四学会合同講演
- 河合章行編 2013 『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 9 玉・玉作関連資料』鳥取県埋蔵文化財センター
- 岸本直文 2014 「芝ヶ原古墳の位置づけをめぐって」『芝ヶ原古墳発掘・調査報告書』城陽市教育委員会
- 肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010 「材質とその歴史的変遷」『月刊文化財』No.566
- 田村朋美 2012 「中原遺跡出土ガラス玉類の自然科学的調査」『中原遺跡VI』佐賀県教育委員会
- 長友朋子 2014 「芝ヶ原古墳出土土器の位置づけ」『芝ヶ原古墳発掘・調査報告書』城陽市教育委員会
- 中村大介 2013 「朝鮮半島の玉文化研究展望」『玉文化』第 10 号
- 中村大介・藁科哲男・田村朋美 2014 「芝ヶ原古墳出土玉類の理化学的分析と考察」『芝ヶ原古墳発掘・調査報告書』城陽市教育委員会
- 廣瀬時習 2002 「芝ヶ原 12 号墳と古墳成立期の王副葬」『同志社大学歴史資料館館報』第 5 号
- 北條芳隆 2000 「前方後円墳と倭王権」『古墳時代像を見なおす』青木書店
- 北條芳隆 2013 「腕輪形石製品」『古墳時代の考古学』4 同成社
- 『芝ヶ原古墳発掘・調査報告書』城陽市教育委員会
- 福永伸哉 2008 「大阪平野における 3 世紀の首長墓と地域関係」『待兼山論叢』史学篇 42
- Nakamura D. 2014, *Bead Traders and Political Power during the Formation of Early States*,

Society for East Asia Archaeology 6th
Worldwide Conference Abstract

藁科哲男・金奎虎・中村大介・魯禔玟 2013「韓
日遺跡出土石製玉類の産地分析から考察する先
史交流について」『2013 東アジア文化遺産保存
国際シンポジウム』

藁科哲男・田村朋美・中村大介・小泉裕司 2014
「XRF, ESR 法による芝ヶ原古墳出土玉類の産
地分析」『第 31 回日本文化財科学会発表要旨』
日本文化財科学会

肥後弘幸 2009「墓制から見た弥生時代の近畿北
部」『市大日本史』12

図版出典

図 1 岸本 2014

図 2・3 城陽市教育委員会 2014『芝ヶ原古墳発
掘調査・整備報告書』城陽市埋蔵文化財
調査報告書第 68 集

図 4 中村・藁科・田村 2014 を改変

図 5・6 及び表 1 藁科哲男作成

図 7 1~5 :佐賀県教育委員会 2012『中原遺跡VI』、
6・7 : 福岡県教育委員会 1996『徳永川ノ上遺跡
II』、8~11 : 春成秀爾・葛原克人・小野一臣・
中田啓司 1969「備中清音村鑄物師谷 1 号墳墓調
査報告」『古代吉備』第 6 集、12 : 近藤義郎編
1995『岡山市矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山墳
丘墓発掘調査団、13 : 石崎善久 1995「金谷古墳
群(1 号墓)」『京都府遺跡調査概報』第 66 冊 京
都府埋蔵文化財調査研究センター、14 : 福井県
教育庁埋蔵文化財センター2009『林・藤島遺跡
泉田地区』

図 8・10 筆者作成

図 9 図中に表記